

書評

アザミウマ防除ハンドブック
診断フローチャート付
柴尾 学著

A5判, 143頁, 本体 2,200円+税
一般社団法人 農山漁村文化協会 (2016年2月25日発行)
(ISBN 978-4-540-14232-1)



農業害虫として知られるアザミウマ類は体長1～2mmと微小で、新芽や花の中に生息し、形や色も似通っているため生産者の目に留まりにくい。アザミウマ類の種を現場で判別することは極めて難しいが、本書では被害の特徴を作物ごとに解説し、種を見分けるを試みている。柴尾氏が解説するように、農作物を加害する主要アザミウマ類5種では、種によって有効な薬剤が異なるため、防除上、種の判別は重要である。本書ではその難しい作業にあえて挑戦し、被害症状を丁寧に分類したフローチャートを用いて発生種を判別している。生産者や現場指導者にとっては非常に便利で、役立つチャートである。

柴尾氏のアザミウマ害虫との出会いは、大学時代のブドウのチャノキイロアザミウマ研究に始まると聞いている。さらに大阪府に奉職されてからも現在に至るまで、精力的に研究を続けてこられた。これまでに発表された論文をたどるとアザミウマ以外の害虫の研究報告も多い。これは“大阪府”という大都市近郊農業で栽培され

る農産物が多様で、様々な害虫が問題となるからに他ならない。柴尾氏はこれらの防除対策を丁寧に研究し論文発表を積み重ねられている。本書でも同じ姿勢が貫かれ、第4章の品目別防除マニュアルでは、野菜から果樹、花き類まで幅広く18品目について、加害アザミウマ種の判別と対策を丁寧に解説している。長年にわたり培ってこられた豊富な経験の集大成である。

1978年のミナミキイロアザミウマの発生以降、ミカンキイロアザミウマ、ネギアザミウマ両性系統、チャノキイロアザミウマ新系統が発生したが、これら新害虫は薬剤感受性が低く、寄主範囲が広いため、全国の生産現場で問題化した。1990年代後半にはネオニコチノイド系殺虫剤が登場し、当初はミナミキイロアザミウマに卓効を示したが、10年以上を経過して防除効果の低下が各地から報告されるなど、再びアザミウマ対策が難しくなっている。このようなときにこそ幅広い防除対策を網羅し、体系化した本書のような解説書が求められている。本書では、アザミウマ類の発生源を断つ圃場管理、飛来を防ぐ物理的防除技術から、発生種確認後の効果的な農薬使用法など、様々な防除技術を組み合わせた総合的防除技術IPMが解説されている。

殺虫剤による防除が難しくなっている生産現場では、天敵利用に興味を持つ生産者が多くなっている。ハダニの薬剤抵抗性が問題となっている静岡県内のイチゴ産地では、ハダニ防除にカブリダニ製剤が広く利用されている。ハダニ類同様、薬剤防除が難しいアザミウマ類に対しても天敵類利用を期待する生産者が増えている。本書でも微生物資材や天敵製剤の利用から、土着天敵の活用まで幅広く解説されており、現場の期待に応えている。

さらに第3章では、新技術の赤色ネット等の物理的防除技術や土着天敵の温存植物など、最新の研究成果が紹介されている。また、飼育方法や薬剤検定法など研究手法や最新の研究成果についてもコラムとして取り上げられており、若い技術者にはアザミウマ類を取り巻く防除研究の現状を知る良い教科書となっている。

このように本書は、主要アザミウマ5種の見分け方から生産現場の防除技術に軸足を置きつつ、最新研究までを幅広く網羅した最新防除技術の解説本である。

(静岡県農林技術研究所 片山晴喜)